

B. H. チェンバレン『ローマ字日本語読本』研究 —ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズ『松山鏡』および 『因幡の白兔』との関連を中心に—

尾崎 るみ

はじめに

バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935、以下、チェンバレン) の業績の中で『古事記』の英訳や第6版まで版を重ねた *Things Japanese* (邦訳あり、『日本事物誌』、以下、『日本事物誌』)⁽¹⁾ の存在は広く知られている。これに対し、彼が編んで1886 (明治19)年に刊行された *A Romanized Japanese Reader; Consisting of Japanese Anecdotes, Maxims, etc., in Easy Written Style; with An English Translation and Notes* (邦訳なし、『ローマ字日本語読本』、以下、『ローマ字日本語読本』)⁽²⁾ という日本語学習者のための「^{リーダー}読本」はほとんど注目されてこなかった。これは、チェンバレン自身が日本語学習の過程で親しんだと考えられるさまざまな書籍から史話・説話などを集めて読み物教材としてまとめたものであり、ローマ字表記の本文に加えて英訳と英語による注釈がつけられている。

『ローマ字日本語読本』の64の課で扱われた話の内容について検討したところ、多岐にわたる出典に驚かされるとともに、同時期にチェンバレンが執筆者のひとりとして関わっていたちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズならびにその編纂に関わっていた『正則文部省英語読本』との関係が浮かび上がってきた。本稿では、ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの『松山鏡』と『因幡の白兔』⁽³⁾、ならびに『正則文部省英語読本』第3巻との関連を中心に『ローマ字日本語読本』について考えてみたい。

I. チェンバレンの来日と日本での仕事

(1) 幼少期の多言語環境

チェンバレンは『日本事物誌2』の「日本文学」(Writing)の項において「例えば、子供を

フランスに住んでいる英国人の家庭に預け、良い環境の中に置き、ドイツ人の（男か女の）家庭教師を雇おうとするならば、彼が自分の故郷の村に留まって唯一の一カ国語を習得するのと同じく、容易に、しかも同じく完全に三カ国語をすべて吸収するであろう。」（チェンバレン、1969年、316ページ）と述べているが、この例えはまさに彼自身の特異な生育環境を示したものであった。

チェンバレンは1850年10月18日、イギリス海軍の将官であった父ウィリアム・チャールズ・チェンバレン（William Charles Chamberlain, 1818-1878）と母エライザ・ジェーン（Eliza Jane, 生年不詳-1856）の第一子としてイギリスの軍港都市ポーツマス郊外で生まれた⁽⁴⁾。しかし、6歳の頃に母親と死別したため、チェンバレンとふたりの弟たちはフランスのヴェルサイユにある父方の祖母の家に預けられ、そこで成長した⁽⁵⁾。

チェンバレンのふたりの祖父は彼の誕生前に没していたが、父方の祖父はイギリスの外交官としてブラジルのリオデジャネイロに長く駐在していた人物で、母方の祖父は1816年に軍艦ライラ号の艦長として西洋人として最も早く朝鮮や琉球の沿岸を調査し、その後、琉球をはじめ、世界各地の旅行記を残したキャプテン・バジル・ホール（Captain Basil Hall, 1788-1844）であった。父方の家族も母方の家族も「故郷の村」で一生を終える人々では全くなかったといえる。チェンバレンの母エライザ・ジェーンはドイツ人家庭教師によって教育されたためにドイツ語を母国語並みに理解し、ドイツ文学や文化に通じた人であったという。それに倣ってなのかどうかは不明だが、ヴェルサイユの祖母の家でチェンバレンたちは住み込みのドイツ人女性家庭教師に養育され、学齢に達すると地元の学校に通った。弟たちは次々とイギリスの寄宿学校に送られていったが、なぜかチェンバレンだけは祖母のもとに留まり、リセの教育を終えた⁽⁶⁾。このように育ったチェンバレンは冒頭の例のごとく、英語・フランス語・ドイツ語を同時に吸収することが出来た。さらに、17歳の時にはスペインで1年間暮らす機会を得て、スペイン語も習得している。

（2）来日の経緯

チェンバレンの家族は、彼の子ども時代から将来はイギリスのオックスフォード大学に進学させたいという望みを抱いており、チェンバレン自身も同大学での学位取得を強く願っていたが、「家庭の事情」と「健康の悪化」によってその計画は実現を見なかった（太田、1990年、91ページ）。詳細は不明だが、チェンバレンが17歳の頃に父方の祖母が死去したことや既に再婚していた父ウィリアム・チェンバレン側の事情が絡んでいたのかもしれない。

就職が決まった経緯も明らかにされていないが、1869年にチェンバレンはロンドンのBaring's Bankという銀行で働き始める。しかしながら、意に染まない銀行勤めでたちまち身

体を壊し、退職する。神経衰弱にかかり、眼も悪くしたためである（太田、1990年、90ページ）。その後は医者勧めた転地療法を3年間ほど行う。冬は叔母（母の妹）のいるマルタ島で過ごし、その他の季節にはイタリア、ギリシャ、スイス、ドイツなどヨーロッパ各地を旅した。しかし、体調は回復せず、いわば最後の望みをかけて帆船による長い航海を提案されたチェンバレンはそれに従い、1872（明治5）年11月に東洋へと旅立った。メルボルン、上海、そして長崎を経由した後、1873（明治6）年5月29日、22歳7カ月のチェンバレンはついに横浜に到着したのである。父方の祖父バジル・ホールがかつて訪れた東洋の国々への興味はあったかもしれないが、明確な目的ではなく、健康の回復のみを願っての旅の途上でチェンバレンは日本に辿り着いたといえるだろう。

到着当時、熱病にかかって衰弱していたチェンバレンは横浜のホテルから英国公使館に移され、駐日イギリス公使パークス夫妻に世話になっている（太田、1990年、110ページ）。熱病に罹患したのは災難であったが、来日直後からサー・ハリー・パークス（Sir Harry S. Parkes, 1828-1885、以下、パークス）の知遇を得たのは幸運なことだったといえるだろう。在日外国人による日本研究が活発となり、日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan、略称ASJ、以下、ASJ）が設立されたのはチェンバレン来日の前年の1872（明治5）年10月のことで、パークスはその主要メンバーであったからである。ASJの初期の活動を積極的に担ったのは、のちにチェンバレンが親交を結ぶアーネスト・サトウ（Ernest Mason Satow, 1843-1929）やウィリアム・アストン（William George Aston, 1841-1911）などのイギリス外交官たちであった。

（3）日本学への過程

その後、チェンバレンは東京に出て芝の青龍寺に住み、僧侶の紹介で元浜松藩士の荒木 蕃^{しげる}（生没年不詳）に「英学教師」として月給50円で雇われる。荒木との契約は1873（明治6）年8月15日から半年間であったが、翌年8月まで延長された（楠家、1986年、79ページ）。チェンバレンの指導によって荒木がどれだけの英語力を身に着けたのか不明だが、荒木はむしろチェンバレンに日本語を教えることに喜びを見出し、それに熱中したようである。荒木の『朝野新聞』への1875（明治8）年9月16日付け投書からは、チェンバレンがわずか5カ月ほどで基本的な日本語をマスターして支障なく会話が出来ようになり、『古今和歌集』をテキストに荒木が手ほどきした日本語読解力も目覚ましく向上、2年足らずで和書を自力で読めるようになったことが分かる（楠家、1986年、80ページ）。

1874（明治7）年10月にチェンバレンはASJに入会し、日本に関するさまざまな分野で研究を行う会員たちとの交流を開始する。基礎的な日本語力を身に着けた後、チェンバレンは鈴木庸正^{つねまさ}（生没年不詳）から幅広く日本文学について学び、橘東世子^{とせこ}（1806-1882）に和歌の手ほど

きを受け、日本研究に没頭していく。健康の回復だけを願って辿り着いた日本で、チェンバレンは夢中になれる対象——ヨーロッパ言語と大きく異なる日本語、そして不思議に満ちた日本文化——を見出したといえるのではないだろうか。チェンバレンは1874(明治7)年9月から海軍兵学校に語学教師として雇われる。そして、教師としての仕事の傍らさまざまな分野の和書を多読して知識を深めると同時に休暇中には「調査」のために日本各地を訪れている。眼と喉の慢性的疾患とは縁が切れずにいたものの、時には富士登山までしている様子からは、日本の気候と生活は幸いにもチェンバレンの身体に特に問題のないものであったことがうかがわれる。

来日からわずか3年後の1876(明治9)年、チェンバレンによる『実語教』の翻訳および解説がイギリスの文芸雑誌・*The Cornhill Magazine* (『コーンヒル・マガジン』)8月号に掲載された。チェンバレンの日本での研究成果がここに初めて公になったのである。その後も、同誌には謡曲「殺生石」の翻訳や『童子教』についての論考などが掲載された。『実語教』も『童子教』もどちらも江戸時代に寺子屋などで用いられた教材だが、恐らくチェンバレンは自身の日本語学習の過程でこれらの書物に出合ったのであろう。また、芝で暮らした当時より能の鑑賞を楽しんだというチェンバレンにとって、「殺生石」は心に残る演目のひとつだったと思われる。チェンバレンは、日本の文学および文化の探求を貪欲に続け、その後はASJでの発表と同協会紀要(Transactions of the Asiatic Society of Japan、略称TASJ、以下、TASJ)への投稿という流れが定着する。初めての発表は、1877(明治10)年1月24日のASJ例会で行われた、日本詩歌における枕詞と掛詞についてのものであった。同年にはロンドンのロイアル・アジア協会(The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland)の会員にもなっている。

チェンバレンは日本語の基礎知識を獲得するやいなや実に多くの和書を読んでその知識を広げ、成果を雑誌や紀要に発表していったが、初の著書となったのは、1880(明治13)年11月にロンドンでTrübner & Co.から刊行された、*The Classical Poetry of the Japanese* (邦訳あり、『日本人の古典詩歌』、以下、『日本人の古典詩歌』)であった。これは、『万葉集』や『古今和歌集』からのさまざまな詩歌ならびに「羽衣」他の謡曲の英訳に解説を加えた227ページに及ぶ大著で、Trübner's Oriental Seriesという学術叢書の1冊に加えられたものである(尾崎、2023年、70ページ)。海軍兵学校に勤務する傍ら、チェンバレンは自身の日本語学習の糸口となった日本の詩歌への関心をさらに深め、原稿をまとめ上げたのである。

チェンバレンはイギリスに一時帰国するための約半年間の休暇を得て1880年10月に日本を立ち、翌年3月末に戻っている。ロンドンでは、当時の駐英公使であった森有礼(1847-1889)に出版されたばかりの『日本人の古典詩歌』を謹呈したほか、ロイアル・アジア協会にも自著の他多くの関連書籍を寄贈している。また、オックスフォード大学比較言語学教授のフリードリッヒ・マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller, 1823-1900)を訪ねて交流もしている(楠家、1986年、164ページ；169-171ページ)。

(4) 『古事記』の英訳と羅馬字会への参加

1881 (明治 14) 年春に海軍兵学校勤務に戻ったチェンバレンだが、日本詩歌についての著書を刊行した後の彼の興味は『古事記』へと向かい、着々とその翻訳にとり組んでいたようである。1882 (明治 15) 年 4 月から ASJ の例会で 3 回にわたって発表されたその成果は、最終的に *A Translation of the "Ko-ji-ki", or "Records of Ancient Matters"* (邦訳なし、『英訳古事記』、以下、『英訳古事記』) と題され、TASJ Vol. X の Supplement [補遺] として 1883 (明治 16) 年 4 月に刊行された。

1885 (明治 18) 年 1 月、東京大学教授の外山正一 (1848-1900) が中心となって日本語のローマ字化推進を目的とした羅馬字会が設立されるが、チェンバレンは同会に設立当初から深く関わっている。当時すでにヘボン式のローマ字綴りが存在していたが、ヘボン式には発音ではなく、むしろ仮名表記に忠実に綴るという問題点があると指摘され、ローマ字による日本語の新たな表記方法が模索されていた。同年 2 月の会合では、書き方取調委員 40 名の中から「書き方の原案を作る委員」7 名が選出されているが、外山正一、矢田部良吉 (1851-1899)、神田乃武 (1857-1923) らに交じってチェンバレンは委員のひとりとなっている。その後、原案をもとに議論が繰り返され、あくまでも発音に忠実に綴ることを重視した「書き方」最終案が 1885 年 3 月 27 日に定められた⁽⁷⁾。

羅馬字会は同年 6 月に全文ローマ字による月刊誌『RÔMAJI ZASSHI』を創刊している。『RÔMAJI ZASSHI』には、チェンバレンの論考「Nihon Rekishi wa Kaki-naoshi wo Yôsu」[日本歴史わ書き直しを要す]⁽⁸⁾ (第 2 冊 21 号、明治 20 年 2 月) やチェンバレンの演説を筆記した「Gem-bun Itchi」[言文一致] (第 2 冊 24 号、明治 20 年 5 月) なども掲載されており、大変興味深い⁽⁹⁾。

やや横道に逸れるがここに記しておく、創刊号から同誌に設けられた「KODOMO NO TAME」欄は、『基督教新聞』の「小児之話」欄 (明治 20 年 11 月開設) や『女学雑誌』の「子供のはなし」欄 (明治 21 年 2 月開設) に先行するものとして注目に値する。「KODOMO NO TAME」欄にはイソップ寓話、グリム童話、アンデルセン童話などの翻訳がローマ字表記で掲載されたので、読者はローマ字の読み方と書き方を学びながら、目新しいお話の数々を楽しむことが出来たのである (川戸、2008 年、226 ページ)。

羅馬字会がローマ字普及の鍵を握る次世代として子どもたちを重要視したことは、1887 (明治 20) 年と翌年に『WAMPAKU MONOGATARI』の第 1 部と第 2 部 (1978 年にはるふ出版が復刻) をそれぞれ刊行したことから明らかである。これは、日本で最初の翻訳絵本といえるものであり、ドイツならびにヨーロッパで評判を呼んだヴィルヘルム・ブッシュ (Wilhelm Busch, 1832-1905) による悪童ふたりのいたずらを描いたドイツ語絵本 *MAX UND MORITZ*

(1865) を木版多色刷りの挿絵を添えて訳出したものであった(川戸、2008年、227ページ)。ドイツ語の韻文は「Wampaku-kozō no hyōban wa/Mimi-kashimashiki mono ni shite,/Idobatabanashi no dai to nari, /Uradana-shakai no kamisan ga/Kuchi-yakamashiku iifurasu.」という具合に七五調に訳された。第3部は刊行されずに終わったため、原作で描かれたふたりの末路が日本の子どもたちに知らされることはなかった。

なお、羅馬字会の最盛期は1887(明治20)年前後で当時は東京本部の他に29もの地方部会が出来、7,000名近くの会員がいたそうだが、次第に活動は衰え、月刊誌も1892(明治25)年12月に廃刊となった(日下部、1933年、20ページ)。チェンバレンは後に『日本事物誌2』の「日本文学」(Writing)の項で羅馬字会の不成功に言及しているが、その要因に「現存する書き言葉」の優位性を挙げ、表意文字が勝利を収めたのだと述べている(チェンバレン、1969年、318-319ページ)。

(5) 文法理論書の刊行

1886(明治19)年3月、チェンバレンはTrübner's Collection of the Simplified Grammar of the Principal Asiatic and European Languages というDr. Reinhold Rostを編者とするシリーズのXV巻目として*A Simplified Grammar of the Japanese Language, Modern Written Style*(邦訳なし、『日本近世文語文典』、以下、『日本近世文語文典』)という書物を出版した。Trübner & Co. は、1880(明治13)年にチェンバレンの『日本人の古典詩歌』を刊行したロンドンの出版社である。『日本人の古典詩歌』はイギリス国内で印刷されたものであったが、『日本近世文語文典』の内扉にはロンドンのTrübner & Co. と共に横浜のKelly & Walshの社名が記され、横浜の新聞社・Japan Gazetteのオフィスで印刷したという記述も見られることから、需要は主に日本にあると見込んだTrübner & Co. がKelly & Walshと共同で刊行したものと考えられる。巻末に置かれた日本語の奥付には、版權免許取得は1885(明治18)年11月19日、出版は翌年3月とあり、著者は「英國人 チャンブレン」、出版人は海軍大尉の高田政久、発兌は横浜の「ケレー、アンド、ワルシ」、売捌人は丸善商社と土屋忠兵衛となっている。

同書の105ページにわたる本文では、日本語における書き言葉、つまり文語の文法理論が丁寧に論じられている。日本語を学び始めてから13年ほどのチェンバレンではあったが、ヨーロッパの多言語に通じた視点で日本語を分析し、『万葉集』や『古事記』から明治期に至るさまざまな時代の書物の多読をとおして日本語の歴史の変遷を認識していたからこそ上梓することが出来た1冊だと考えられる。

同書に続き、同年5月には、『ローマ字日本語読本』が同じくTrübner & Co. とKelly & Walshによって刊行された。同じように巻末に置かれた日本語の奥付には、版權免許取得は

1886（明治19）年4月26日、出版は同年5月28日とあり、著者は「英國人 チャンブレン」、出版人は海軍軍医総監の高木兼寛、発兌は横浜の「ケレー、アンド、ワルシ」、売捌人は丸善商社と土屋忠兵衛となっている。印刷を行ったのは横浜のもうひとつの新聞社・Japan Mailである。チェンバレンは序文で、理論を『日本近世文語文典』で学んだ者が『ローマ字日本語読本』で実際の書き言葉を学べるように編んだと述べている。これら2冊は横浜のふたつの新聞社を巻き込んでほぼ同時期に準備されたものといえる。

ついでに記しておく、1888（明治21）年10月にはTrübner & Co.と博聞本社／博聞分社から*A Handbook of Colloquial Japanese*（邦訳あり、『日本語口語入門』、以下、『日本語口語入門』）が刊行されている。これは、文語について解説した『日本近世文語文典』に続いて、話し言葉、つまり口語に焦点を置いてまとめたものである。全468ページの本文は理論編と実践編でそれぞれ約半分を占め、実践編には英和辞典的な英語／日本語の一覧、会話文例、ことわざ、逸話3編、円朝『牡丹灯籠』筆記録の一部などの読み物、和英辞典的な日本語／英語単語一覧が収められた。

チェンバレンは1886（明治19）年4月から文部大臣森有礼の後援などにより文部省に雇われ、東京大学⁽¹⁰⁾で教えると同時に文部省編輯局で教科書や事典の編纂に関わり始める（相原、1973年、157ページ）。1887（明治20）年4月には文部省編輯局から日本語による『日本小文典』が「ビー・エッチ・チェンバレン著」として刊行されているが、この内容は『日本近世文語文典』を基に日本語の文法理論を概説したものと考えられる。また、1889（明治22）年に文部省が刊行した『正則文部省英語読本』全5巻の編纂にもチェンバレンは外山正一と共に関わっている⁽¹¹⁾。羅馬字会委員としての働きなどが認められ、幅広い分野でのチェンバレンの活躍が期待されていたものと思われる。

II. 『ローマ字日本語読本』について

（1）『ローマ字日本語読本』の構成と特徴

『ローマ字日本語読本』は、ローマ字で記された読み物を並べたPart 1（106ページ）とその英訳をまとめたPart 2（135ページ）、使用された語句などを解説したPart 3（103ページ）の3部門からなる1冊である。多くの場合、Part 3では出典についての言及も行われており、チェンバレンが教材用の文章をどこから採ってきたのかを特定するための重要な情報源となっている。

Part 1にはタイトルがついた64の読み物教材が収められている。本文は羅馬字会が定めたローマ字の綴り方に従って記され、各語句の発音に基づいたローマ字表記となっている点も特

徴といえる。Part 1は、‘Kotowaza—1.’から始まるが、本稿では、今後これを第1課 ‘Kotowaza’ [諺]としてローマ字タイトルに続けて漢字仮名交じり表記を [] 括弧内に示すことにする。

先行研究について触れておくと、平川祐弘はラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904、帰化後は小泉八雲) の著作との関連において、『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房、2004年)で第38課 ‘Matsuyama Kagami’ [松山鏡]の内容を紹介しているが、これについてはⅢ章で詳しく述べたいと思う。

もうひとつの先行研究としては、高梨健吉が『日本英学史考』(東京法令出版、1996年)の第4章「チェンバレンを読む」において、第1課 ‘Kotowaza’ [諺]、第4課 “‘Jitsugo-Kyō’ Nukigaki” [『実語教』抜き書き]、第5課 “‘Dōji-Kyō’ no Uchi” [『童子教』のうち]、第6課 ‘Shōni no Hi wo Ronzuru Koto’ [小児の日を論ずる事]、第23課 ‘Kizu Tsukitaru Suzume no Hanashi’ [傷つきたる雀の話]、第24課 ‘Tōzoku no Chiryō’ [盗賊の治療]、第45課 ‘Haikai no Shikujiri’ [俳諧のしくじり]、第52課 ‘Kari’ [雁]、第53課 ‘Haru’ [春]、第54課 ‘Wakare’ [別れ]、第55課 ‘Ryoya no Shokai’ (Toho no Shi.) [旅夜の書懐：杜甫の詩]の全11課のローマ字本文を漢字仮名交じりで書き出して掲載し、『ローマ字日本語読本』の内容が多様性に富んでいることを示している。これらからもチェンバレンが実にさまざまな書物から読み物教材用の話を採ったことが推察出来るが、全体像を把握するためには紹介されなかった残りの53課の内容も検討する必要があるだろう。

チェンバレンは学習者の読解力を考慮して前半では短く分かりやすい、平易な語彙による読み物を掲げ、徐々に長く複雑な内容のものにと進めるように工夫している。第1課 ‘Kotowaza’ [諺]には、冒頭の ‘Doku wo motte doku wo semu.’ [毒をもって毒を攻む。]以下、合わせて20の諺が並べられており、これらが一番短い文章例となっている。最も長いものは、終盤の第62課 ‘Ichi-ryō-zon no Sabaki’ [一両損の裁き]で6ページ以上に及ぶ。この話は、落語の「三方一両損」としても知られる大岡越前の政談もののひとつである。

全64課から諺を紹介した第1課、『実語教』の一部を挙げた第4課、『童子教』の一部を挙げた第5課、『女大学』の一部を挙げた第26課、朝鮮の風俗についての第33課、『古今和歌集』からの詩歌を紹介した第52課～第54課、杜甫の漢詩を紹介した第55課、これら合わせて9課を除いた計55課を考察の対象とするが、これらは実にさまざまな史話・説話であり、13課は中国の話、残りの42課は日本の話となっている。

Part 3にローマ字で記された書名を頼りにPart 1のローマ字本文の出典を確かめるという作業を行い、調査結果は【表1】としてまとめた。10の話については、出典を突き止めることが出来なかった。また、チェンバレンが挙げた書物には該当する話を見つけることが出来ず、誤記と判明したケースもあるが、最終的に全体の8割以上について出典を確認することが出来た。

チェンバレンは自身の日本語学習の過程で、日本文化の根底には中国の思想や文化があり、

日本における学問の歴史は漢学の移入から始まることを理解すると同時に、中世以降明治初期に至るまで広く用いられた教科書類には、日本と中国の史話・説話が多数掲載されていたことも認識していたと思われる。また、調査の結果、『ローマ字日本語読本』のいくつかの話は1873（明治6）年に文部省から刊行された那珂通高・稲垣千穎撰『小学 読本』巻4ならびに巻5から採られていることが分かった。和漢洋のさまざまな話をバランスよく採ったこの教科書に目をとおしたチェンバレンは、その編集方針を理解していたことになるだろう。同書を含む多くの先例を参考にして、チェンバレンは自身が編む「読本」の構成に知恵を絞ったに違いない。

後に具体例を挙げるが、チェンバレンは比較的短い話については極力原文どおりに採用することを心掛けたと思われる。全体として、無暗に文章に手をいれることは避け、読み物教材とするための必要最小限の編集を行ったといえるのではないだろうか。もちろん長い話を簡略化して掲載している場合も認められるが、例外的といえる。

また、幅広い時代ならびにジャンルの書物から選ばれた読み物教材の多様性も特徴として挙げることが出来る。詳しくは後に触れるが、神話の世界の話から紀元前の中国・戦国時代の孟子の話、日本の武将の話、安政大地震の状況を伝える文章、笑い話、同時代の新聞や雑誌で用いられる書き言葉の典型として福沢諭吉の文章の一説までが収録されている。日本語学習の初学者には難易度が高すぎるのではないかと思われる内容も少なくないが、『ローマ字日本語読本』には魅力ある「読本」を編もうと奮闘したチェンバレンの熱い思いが込められているように思われる。

（2）中国の史話・説話とその出典について

まずは、13の課で扱われた中国の話について見ていきたい。チェンバレンはPart 3において、第2課 ‘Myōnen Onaji Toshi to Naru Koto’ [明年同じ歳となる事]、第3課 ‘Senri-no Uma wo Ukezaru Koto’ [千里の馬を受けざる事]、第6課 ‘Shōni no Hi wo Ronzuru Koto’ [小児の日を論ずる事]、第8課 ‘Shokuchū ni Kamisuji Aru Koto’ [食中に髪すぢある事]、第9課 ‘Kin wo Ataete Majiwariwo Yamuru Koto’ [金を与えて交わりをやむる事]、第10課 ‘Ko to Oi to Shabetsu Aru Koto’ [子と甥と差別ある事]⁽¹²⁾、第17課 ‘Utsukushiki wo Kuraburu Koto’ [美しきを比ぶる事]、第20課 ‘Tsuma Otto wo Korosasuru Koto’ [妻夫をころさする事]の8話の出典を『語園』と記している。『語園』は室町時代の古典学者・一条兼良（1402-1481）が宋の時代の百科事典ともいえる類書「新編古今事文類聚」から中国の故事説話 211 話を採って漢文訓読調でまとめたものといわれ、1627（寛永4）年に2巻2冊の古活字版が刊行されたのを機に普及し始めたという（吉田、1978年、25-26ページ；花田、2003年、27-28ページ）。

第3課 ‘Senri-no Uma wo Ukezaruru Koto’ [千里の馬を受けざる事] を例にあげてみると、そのローマ字本文は次のとおりである。

Kōbun Kōtei no toki, ichi-nichi ni sen-ri wo kakeru uma wo kenzu. Mikado notamawaku: “Ban-yo mae ni ari. Shokusha shirie ni ari. Hi ni yuku koto go-jū-ri narade wa, yuku koto nashi. Chin hitori sen-ri no uma wo norite, nani ni ka sen?” tote, sunawachi sono uma wo kaeshite, uke-tamawazu.

次に吉田幸一編古典文庫第377の『語園』〈古活字版〉で「千里ノ馬ヲウケサル事（漢書）」を参照すると、本文は「孝文皇帝ノ時一日二千里ヲカケル馬ヲ献帝曰蠻輿前ニアリ属車後ヘニアリ日ニ行事五十里吾獨ハ千里ノムマニ乗テ何カセン則其馬ヲカヘシテウケス」となっており、先に示したローマ字本文とは文体が異なることが分かった。また、第20課の ‘Tsuma Otto wo Korosazuru Koto’ [妻夫をころさす事] は、『語園』所収の211話には含まれていないことが判明した。

吉田幸一によると、『語園』古活字版の覆刻版がおよそ半世紀に渡って刊行され続けた一方で1658（明暦4）年には全211話のうち179話を和文調に直した平仮名本（3巻）が仮名草子風の挿絵入りで刊行され、さらに平仮名本（明暦4年版）を再版した3巻に、「女部」として女性についての説話42話を収めた2巻を加え計5巻5冊として『見ぬ世の友』と改題したものが刊行されるに至ったという（吉田、1978年、29-34ページ）。そこで、吉田幸一編古典文庫第378の『見ぬ世の友』〈明暦版複製〉を参照すると、第20課 ‘Tsuma Otto wo Korosazuru Koto’ [妻夫をころさす事] の内容と一致する「妻おつとをころさす事」は第4巻「女部上」に収められており、これ以外の7話も『見ぬ世の友』に所収されていることが分かった。

なお、『見ぬ世の友』第2巻の「千里の馬をうけざる事」の本文は次のとおりであり、先に挙げた第3課 ‘Senri-no Uma wo Ukezaruru Koto’ の文章はこれをほぼそのとおりにローマ字で記したものと判明した。

孝文皇帝の時。一日に千里をかける馬^{むま}を献す。帝云蠻輿前^{しり}にあり。属車後^{しり}へにあり。日に行事^{ゆく}五十里ならでは行事なし。我^{ひと}獨り千里のむまにのつて何にかせん^{すなはち}とて則その馬をかへしてうけず（下線引用者）

下線部は、チェンバレンが手を加えた箇所である。チェンバレンは「我」を「朕」に、「にのつて」を「をのりて」に、「うけず」を「うけたまわず」に変更し、カンマ、疑問符、引用符などを加えて体裁を整えたことが分かる。このように比較的短い文章の場合、チェンバレン

はあくまでも原文を尊重してむやみに手を加えてはいない。ただし、ローマ字会の定めた書き方に基づいて、「後へ」や「かへして」などの単語は発音に従って「shirie」ならびに「kaeshite」と表している。

残る5つの中国の話は、『孟子』からの一説、孟子の母の「孟母三遷」ならびに「孟母断機」の話、『二十四孝』の郭巨の話、政治家の季札や王安石の逸話となっているが、出典については【表1】をご覧ください。

(3) 日本の史話・説話とその出典

日本の話は42話も採られているのでその内容は多岐にわたるが、最初に登場する日本の話は第7課 ‘Mukade Hebi no Mondō’ [むかで蛇の問答] である。これは江戸中期の滑稽本『田舎莊子』巻上「むかでへびニギモン 蛇 疑問」冒頭から蛇と蛇の会話部分のみを抜き出した短いものとなる。チェンバレンは本文をほぼそのままローマ字表記に直している。

ほとんどの場合、チェンバレンは特に手を入れずに原文をそのまま採用する方針を守っているが、長く複雑な話の場合は学習者が理解しやすいように冗長な部分を削除したり、易しい表現に書き改めたりしている。このような編集操作が顕著に認められるのは、本文末尾で『宇治拾遺物語』から採ったと断っている第23課 ‘Kizu Tsukitaru Suzume no Hanashi’ [傷つきたる雀の話] である。これは「舌切り雀」の原型のひとつとも考えられる「腰折雀」にあたる『宇治拾遺物語』巻3の「雀報恩事」を短くまとめたものである。

「雀報恩事」の冒頭は「今は昔、春つかた、日うらかなりけるに、六十ばかりの女ありけるが、虫うち取りてゐたりけるに、庭に雀の子歩きけるを、童部、石を取りて打たれば、あたりて腰をうち折られにけり。」であるが、これをチェンバレンは[[今は昔、この国に六十路に余りつる女あり。ちごどもの打ちたるつぶての雀の子に当たりて、腰打ち折られて悩みけるを…]] (筆者注：原文はローマ字) と始めている。「悩みける」は原文にはない表現でチェンバレンが雀の心情を推し量って加筆した部分といえる。ここで全文を詳しく検討する余裕はないが、チェンバレンは物語の要点はしっかりと押さえながらも「雀報恩事」を半分ほどの長さに縮め、第23課を3ページ半の分かりやすい話にまとめ上げている。

『宇治拾遺物語』からは同じく3巻から「絵仏師良秀家ノ焼ヲ見テ悦事」も採られており、第40課 ‘Ryōshū no Fudō’ [良秀の不動] となっている。これは短い話のためか、末尾に一部省略が見られる他はすべて原文どおりとなっている。

鎌倉幕府で北条氏に仕えたという青砥藤綱の逸話を扱った第28課 ‘Me wo Tojite Uttae wo Kiku’ [目を閉じて訴えを聞く]、第29課 ‘Makoto no Sekkenn’ [誠の節儉]、第30課 ‘Aoto Fujitsuna Honin wo Jisu’ [青砥藤綱補任を辞す] の3つの課からもチェンバレンのこだわり

が感じられる。チェンバレンは第28課と第30課の出典については、Part 3で『曲亭遺稿』と記している。調べてみたところ、元々は曲亭馬琴（1767-1848）の『青砥藤網模稜案』（1812）に附録として添えられた「青砥左衛門尉藤網本傳」が松村操編『曲亭遺稿 附 馬琴行状記』（思誠堂、1883年）という本に「青砥藤網伝」として収められたことが判明した。チェンバレンはここから馬琴の表現をほぼそのまま抜き出して第28課と第30課の本文としている。

第29課で扱われているのは川に落とした10文を拾うために50文の松明を購入したという有名な話で、「青砥藤網伝」に含まれているにもかかわらず、チェンバレンは日本の教科書から採ったと述べている。当時の国語教科書のひとつ、文部省から1873（明治6）年に刊行された那珂通高・稲垣千穎撰『小学読本』巻5第17課には「吝嗇と節儉とは似て非なるもの故に世には節儉を喜びて吝嗇に流るゝもの多し青砥藤網の如きは誠の節儉の士と謂ふべし」と始まる同じ逸話が載っている。第29課を見てみると、チェンバレンはタイトルを‘Makoto no Sekkenn’ [誠の節儉] としただけではなく、句読点などを加えた他はこの教科書本文をそのまま採用していることが分かった。これは、最適な文章表現を求めてチェンバレンがわざわざ他の文献に当たった例といえるだろう。チェンバレンは青砥藤網のこの逸話が気に入っていたらしい。後にこの話を話し言葉で書き改めて『日本語口語入門』の実践編に読み物教材のひとつとして再録しているからである。『ローマ字日本語読本』のPart 2でのタイトルは‘True Thrift’であったが、『日本語口語入門』での英文タイトルは‘True Economy’に改題されている⁽¹³⁾。

別のこだわりは、第48課‘Nintoku Tennō Tami no Kamado wo Nigiwasu’ [仁徳天皇民の竈を賑わす]に見出すことが出来る。『幼学綱要』（宮内省、1882年）にも収められている有名なこの話をチェンバレンは『日本書記』から直接採っているのだが、そこに『新古今和歌集』巻7から「高さ屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」という和歌を挿入しているからである。『日本書記』から仁徳天皇の逸話を紹介するだけでなく、後の時代に詠まれた歌を添えることによってこの話に奥行を与えようと考えたのかもしれない。

チェンバレンは江戸後期の笑話集『しみのすみか物語』から第34課‘Myōga no Kōnō’ [茗荷の効能]をはじめとして第39課、第41課、第42課と全部で4話を採っている。この他、江戸初期の『可笑記』や『本朝桜陰比事』からも笑いを誘う話が採られており、チェンバレンが出来るだけ楽しい「読本」を目指して工夫したことがうかがわれる。

すべての出典について論じる余裕はないが、チェンバレンが『ローマ字日本語読本』の日本の話を採った書物としては、先に挙げたものの他に『梧窓漫筆』、『和漢故事文選』、『本朝語園』、『女訓玉文庫』、『北窓瑣談』、『雨窓閑話』、『一休諸国物語図絵拾遺』、『安政見聞誌』、『心学教諭録』、『本朝侠客伝』、『耳袋』、『北越雪譜』、『大岡美談』、『雪の曙：赤穂美談』、『落穂集』がある。『ローマ字日本語読本』はチェンバレンが木版で刷られたこれら江戸期の書物を渉猟し

た成果のひとつといえるだろう。これらの中には国立国会図書館に所蔵されていないものも含まれていたが、国文学研究資料館の国書データベースならびに近代書誌・近代画像データベースや東京学芸大学教育コンテンツアーカイブを利用して確認作業を行うことが出来た。詳しくは【表1】をご覧ください。

【表1】『ローマ字日本語読本』(A Romanized Japanese Reader, 1886) 内容一覧

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
1	Kotowaza [諺] Proverbs		
2	Myōnen Onaji Toshi to Naru Koto [明年同じ歳と成る事] Becoming the Same Age Next Year	『見ぬ世の友』3-34 「明年同歳となる事」	チェンバレンは『語園』 と記入
3	Sen-ri no Uma wo Ukezaruru Koto * [千里の馬を受けざる事] Refusing to Accept a Thousand Mile Horse	『見ぬ世の友』2-28 「千里の馬をうけざる事」	チェンバレンは『語園』 と記入 21課 Useless Gift
4	“Jitsugo-Kyō” Nukigaki [[『実語教』抜き書き] Extract from the “Teaching of the Words of Truth.”	『実語教』	1876年8月、『コーンヒル・ マガジン』に英訳を発表
5	“Dōji-Kyō” no Uchi [[『童子教』のうち] Extract from the “Instruction for the Young.”	『童子教』	1876年10月、『コーンヒル・ マガジン』に英訳を発表
6	Shōni no Hi wo Ronzuru Koto [小児の日を論ずる事] Children Discussing about the Sun	『見ぬ世の友』1-1 「小児の日を論ずる事」	チェンバレンは『語園』 と記入
7	Mukade Hebi no Mondō [むかで蛇の問答] Dialogue Between the Centipede and the Snake	『田舎荘子』巻上 「蚊蛇疑問」	
8	Shōkuchū ni Kamisuji Aru Koto [食中に髪すぢある事] A Hair in the Food	『見ぬ世の友』3-48 「食中に髪すぢある事」	チェンバレンは『語園』 と記入
9	Kin wo Ataete Majiwari wo Yamuru Koto [金を与えて交わりをやむる事] Stopping Intercourse by Giving Money	『見ぬ世の友』3-40 「金を与て交をやむる事」	チェンバレンは『語園』 と記入
10	Ko to Oi to Shabetsu Aru Koto [子と甥と差別ある事] The Difference Between a Child and a Nephew	『見ぬ世の友』1-18 「子と姪と差別ある事」	チェンバレンは『語園』 と記入 姪に「をい」の振り仮名 のため nephew としたか

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
11	Kunshi no Kokoroe [君子の心得] A Hint to the Good and Wise	『梧窓漫筆』 巻上	
12	Kisatsu no Koto * [季札のこと] The Story of Kisatsu	『和漢故事文選』 巻4	チェンバレンは『故事文選』と記入 106 課 Kisatsu's Delicate Sense of Honour
13	Anshi Soō ni Kotō [安石宋王に口答] Anshi's Reply to the King of So	不詳	チェンバレンは recent lecture から採ったと記入
14	Mōshi no Haha * [孟子の母] The Mother of Mencius	『小学 読本』 巻4 第24 課	チェンバレンは日本の教科書からとのみ記入 57 課／59 課 The Mother of Mencius (I) (II)
15	Kōshi ni Nisete Roku wo Uru Koto [孝子に似せて禄を得ること] Obtaining Money by Counterfeiting the Conduct of a Filial Son	『本朝語園』 巻第2 「贗孝子得録」	
16	Jinsei. (Mōshi no Uchi.) [人生 (孟子のう)] Man's Nature (From Mencius)	『孟子』 「告子章句上」	
17	Utsukushiki wo Kuraburu Koto [美しきを比ぶる事] Comparing Beauty **	『見ぬ世の友』 2-3 「美をくらぶる事」	チェンバレンは『語園』と記入
18	Kakkyo. (Ni-jū-shi-kō no Uchi.) [郭巨 (二十四孝のうち)] Kakkyo (One of the Four-and-Twenty Paragons of Filial Piety)	『女庭訓宝文庫』 「郭巨」	チェンバレンは『女訓玉文庫』と誤記
19	Watakushi-gokoro [私ごころ] Self-Love	不詳	チェンバレンは様々な native sources から採ったと記入
20	Tsuma Otto wo Korosasuru Koto [妻夫を殺さす事] A Wife Causing the Murder of Her Husband	『見ぬ世の友』 4-8 「妻おつとをころさす事」	チェンバレンは『語園』と記入
21	Kame-wari Shibata * [甕割り柴田] Shibata the Jar-Breaker	『初学文範』 巻1	125 課／128 課 Shibata the Jar-Breaker (I) (II)
22	Karasu no Kaiwa [鳥の会話] The Crow's Conversation	不詳	チェンバレンの言及はなし

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
23	Kizu Tsukitaru Suzume no Hanashi [傷つきたる雀の話] The Story of the Wounded Sparrows	『宇治拾遺物語』 卷3 第16 「雀報恩事」	
24	Tōzoku no Chiryō * [盜賊の治療] A Cure for Theft	『北窓瑣談』 卷3	チェンバレンは出典を『梧窓漫筆』と誤記 134 課 A Cure for Theft
25	Anadori no Mukui [侮りの報い] Ridicule Retaliated Upon	不詳	チェンバレンの言及はなし
26	Onna Daigaku no Uchi [女大学のうち] From the "Greater Learning for Women"	『女大学』	1878 年7月、ロイヤル・アジア協会の紀要に英訳を発表
27	Kimi ni Tsukōru no Kokoroe * [君に仕るの心得] A Hint as to How to Serve a Master	『雨窓閑話』 卷之中 「曾呂利并阿部候供大膳が事」	チェンバレンの言及はなし 69 課／71 課 Sorori's Shrewd Wit (I) (II)
28	Me wo Tojite Uttae wo Kiku [目を閉じて訴えを聞く] Hearing Cases with the Eyes Shut	『曲亭遺稿』 「青砥藤網伝」	
29	Makoto no Sekken [誠の節儉] True Thrift	『小学 読本』 卷5 第17 課	チェンバレンは日本の教科書からとのみ記入 True Economy と改題して『日本語口語入門』に再録
30	Aoto Fujitsuna Honin wo Jisu [青砥藤網補任を辞す] Aoto Fujitsuna Refuses an Investiture	『曲亭遺稿』 「青砥藤網伝」	
31	Mateba San-yō no Ai-yoru Naka [待てば算用の相寄る中] A Case in Which Waiting will Make the Calculation Come Right	『本朝桜陰比事』 卷3 「待てば算用も相寄る中」	Mateba Au Toshi と改題して『日本語口語入門』第2版に再録
32	Zoku no Kaigo [賊の改悟] A Thief's Conversion	『北窓瑣談』 3 卷	チェンバレンは『雨窓閑話』と誤記 盤珪禪師の逸話
33	Chōsen no Fūzoku [朝鮮の風俗] The Manners and Customs of the Koreans	不詳	チェンバレンは『朝鮮事情』(1874) からと記入
34	Myōga no Kōnō [茗荷の効能] The Efficacy of "Myōga"	『しみのすみか物語』 下	チェンバレンは『しみのすみか』と記入
35	Ikkyū Tengu Mondō [一休天狗問答] Dialogue Between Ikkyū and a Goblin	『一休諸国物語図絵拾遺』 (天) 「天狗問答」	

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
36	Himbyō [貧病] The Disease Poverty	『可笑記』巻2	
37	Yoshitsune no Tonchi [義経の頓智] Yoshitsune's Acuteness	不詳	チェンバレンは modern lecture よりと記入
38	Matsuyama Kagami * [松山鏡] The Matsuyama Mirror	『本朝女二十四孝』 「越後松山孝女」	チェンバレンは様々な native sources よりと記入 38課/40課 The Matsuyama Mirror (I) (II) 『女訓玉文庫』所収の『本朝女二十四孝』を参照か
39	Ikka no Shiremono [一家の痴れ者] A Family of Fools	『しみのすみか物語』下	チェンバレンは『しみのすみか』と記入
40	Ryōshū no Fudō * [良秀の不動] Ryōshū's Picture of Fudō **	『宇治拾遺物語』巻3第6 「絵仏師良秀家ノ焼ヲ見テ悦事」	53課/55課 An Artist's Opportunity (I) (II)
41	Suzuri [硯] The Ink-Stone	『しみのすみか物語』下	チェンバレンは『しみのすみか』と記入
42	Kusushi Gōtō wo Ou [薬師強盗を追う] A Physician Expels the Burglars	『しみのすみか物語』上	チェンバレンは『しみのすみか』と記入
43	Ran [蘭] Orchids **	『北窓瑣談』2巻	
44	Edo Ōjishin [江戸大地震] The Great Earthquake of Yedo	『安政見聞誌』序	
45	Haikai no Shikujiri [俳諧のしくじり] A Blunder in a Comic Stanza	『心学教諭録』第2篇中之巻 「下男鍬をうばひて発句をなすの譬論」	
46	Akaiko [赤猪子] Akaiko	『古事記』下つ巻	1883年4月『英訳古事記』TASJ Vol.X Supplementとして刊行

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
47	Yamato-take no Mikoto * [倭建命] Prince Yamato-take	『古事記』 中つ巻	1883年4月『英訳古事記』 TASJ Vol.X Supplement として刊行 113課 Prince Yamato- take and the Bravoos of Kumaso
48	Nintoku Tennō Tami no Kamado wo Nigiwasu [仁徳天皇民の竈をにぎわす] The Emperor Nintoku Makes the People's Kitchen Ranges Cook Plentifully	『日本書紀』 卷11	チェンバレンは『日本紀』 と記入 新古今和歌集の「高き屋 に登りて見れば煙立つ～」 も紹介
49	Inaba no Shiro-usagi [因幡の白兎] The White Hare of Inaba	『古事記』 上つ巻	1883年4月『英訳古事記』 TASJ Vol.X Supplement として刊行
50	Yōchi no Imashime [幼稚の戒め] Advice to the Young	不詳	チェンバレンは今川氏の 教えから採ったと記入
51	Tenarai no Kyōkun [手習いの教訓] Advice about Learning to Write	不詳	チェンバレンは中世の『手 習い教訓』より採ったと 記入
52	Kari [雁] The Wild Geese	『古今和歌集』 191 番	白雪にはねうちかはし飛 ぶかりのかずさへ見ゆる 秋の夜の月
53	Haru [春] Spring	『古今和歌集』 28 番	も、ちどりさへづる春は 物ごとにあらたまれども 我ぞふりゆく
54	Wakare [別れ] Parting	『古今和歌集』 402 番	限りなくおもふ涙にそほ ちぬる袖はかわかじあは ん日までに
55	Ryōya no Shokai (Toho no Shi) [旅夜の書懷 (杜甫の詩)] A Wanderer's Outpourings (Chinese Poem by Toho)	「旅夜書懷」	杜甫の最晩年の五言律詩 細草微風岸／危檣独夜舟 ／星垂平野闊／月湧大江 流 (以下略)
56	Kin-Kamban Jinkurō [金看板甚九郎] Jinkurō with the Golden Signboard	『本朝侠客伝』 「金看板甚九郎」	
57	Ashiki Tawamure wa Itasu-majiki Koto [悪しき戯れは致すまじき事] One Should not Play Practical Jokes	『耳袋』 卷の1 「悪しき戯れ致すまじき事 附 悪事に頓智の事」	
58	Kuma Hito wo Tasuku [熊人を助く] A Man Spared by a Bear	『北越雪譜』 上之巻 「熊人を助 (たすく)」	

課	タイトル (ローマ字／漢字仮名表記／英語)	出典 (書名、表題、その他)	備考 (『正則文部省英語読本』 第3巻のタイトル、その他)
59	“Soku Shin Ze Butsu” [即心是仏] “The Heart Itself is Buddha”	不詳	チェンバレンはある僧の 作品から採ったと記入
60	Ishin no Ben [維新の弁] A Discussion on the New Departure **	『学者安心論』	1876年刊行の福沢諭吉の 著作
61	Hōben no Setsu [方便の説] An Explanation of Pious Devices	不詳	チェンバレンはある仏教 雑誌の記事より採ったと 記入
62	Ichi-ryō-zon no Sabaki [一両損の裁き] The “One Dollar Loss” Judgment	『大岡政談畔倉重四郎之記』 「畳屋・建具屋出入の事」 「壹両損裁許の事」	チェンバレンは『大岡美 談』と記入
63	Asano Naganori no Seppuku [浅野長矩の切腹] Asano Naganori's Performance of “Harakiri”	『雪の曙：赤穂美談』第2 回 「公事を弄して老兎浅野を 辱かしむ 私忿に迫りて仁 君吉良を刺さんとす」	チェンバレンは『雪の曙』 と記入
64	Kozō San-ga-jō [小僧三ヶ条] The Acolyte's Three Items	『落穂集』巻2 「小僧三ヶ条の事」	

*：『正則文部省英語読本』に類話が所収されたもの。**：『英学新誌』に再録。

Ⅲ. ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズとの関係

(1) 第38課 ‘Matsuyama Kagami’ [松山鏡] と『本朝女二十四孝』

『ローマ字日本語読本』に第38課 ‘Matsuyama Kagami’ [松山鏡] が取められていることは、平川祐弘著『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』（ミネルヴァ書房、2004年）で指摘されていたが、残念ながら筆者は今回の調査で初めてチェンバレンによるこの「松山鏡」の存在に気づいた。これまで筆者はちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズ第10編『松山鏡』（以下、ちりめん本『松山鏡』）の典拠をユンカー・フォン・ランゲック（Junker von Langegg, 1828-没年不詳）が1884年に刊行したドイツ語による日本昔話集 *Fu-Sō-Cha-Wa, Japanische Theegeschichten, Eine Sammlung Volks-und Geschitlicher Sagen, Legenden und Maerchen der Japaners*（邦訳あり、『外国人の見たお伽噺——京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』』）所収の ‘Das Madchen aus Echigo’ [越後の少女] に求めてきた（尾崎、2021年、18-19ページ）が、今やこの説を撤回しなければならない。

結論から述べると、ちりめん本『松山鏡』の典拠は『ローマ字日本語読本』第38課 ‘Matsuyama

Kagami' [松山鏡] の英訳 'The Matsuyama Mirror' であるとしてよいだろう。そう考える理由をこれから述べていきたいが、まずはチェンバレンの第 38 課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] のローマ字本文を漢字仮名交じり表記で示しておきたい。

[越後の国松山に、なにがしといえる者の娘わ、いとけなくして父母に孝をつとむること切なり。その母重き病に臥しける時、さる年この片山里にわいまだなきものなりとて、夫の都土産にもらいし鏡一面日頃隠し持ちけるが、取りいだして、娘に与え、「われ亡からん後は、朝夕われと書いてこの鏡を見るべし」と遺言して、ついに空しくなりにけり。

娘深く嘆きて、その後は母が教えに違わず、朝夕この鏡に向えば、母の面影鏡の内にあり。おのが影の写るといふを知らざりければ、嬉しく思ひて、日に日に母に会う心して、あつくこれを敬いけり。その父あやしと思ひて、その故を問うに、娘しかじかの由を答えければ、父も「いと不憫なることなり」と、涙にくれしとぞ。]

チェンバレンは第 38 課の Part 3 解説部分の末尾に 'This story has been made up from various native sources.' [この話は日本のさまざまな出典から作り上げたものである。] と記して、この話の出典を具体的に挙げていない。徳田進は「松山鏡伝説は、謡曲、狂言、民話を通じて中世に長く流れた」もので、それが近世、さらには近代まで続き、明治期には昔話や国語教材として子どもたちにも提供されるようになったとし、これらは悲劇性の強いものと喜劇性が強いものに大別できると述べている（徳田、1963 年、452 ページ）が、チェンバレンによる短い第 38 課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] は悲劇性に傾いたもので、娘の健気さを強調したものといえるだろう。

それにしても、チェンバレンはどのようにこの話をまとめたのだろうか。手がかりもなく探しあぐねていたところ、チェンバレンが第 18 課 'Kakkyo. (Ni-jū-shi-kō-no-Uchi.)' [郭巨(二十四孝のうち)] の出典として誤って挙げた『女訓玉文庫』に『本朝女二十四孝』が収められており、その中に「越後松山孝女」という話が含まれていることに気づいた。郭巨の話は、よく似た書名の『女庭訓玉文庫』に載っていることも分かったが、『女訓玉文庫』という書名を挙げているからにはチェンバレンはこの書物を読んだことがあるに違いない。1858 (安政 5) 年に往来物のひとつとして刊行された『女訓玉文庫』には、頁下部には『女大学』の本文が、頁上部には挿絵入りで『本朝女二十四孝』の各話が印刷されているという構成となっている。『本朝女二十四孝』は江戸時代に刊行されたという作者不詳の書物だが、『女大学』と抱き合わせて往来物として刊行されたこともあったのだ。「越後松山孝女」の他には、「伽娑御前」、「常盤御前」、「源義経妾静」なども収められている。

「越後松山孝女」の全文は下記のとおりである。

越後松山何某の女は、幼にして父母に孝を勤むる事切なり。其母重き病に伏しける時、日頃かくし持ちける一面の鏡をとり出して、娘にあたへ、我なからん後は、朝夕我と思ひて、此鏡を見るべしと遺言して、終に空しく成りにける。娘深く嘆きて、其後は母が教に違はず、朝夕此鏡に向へば、母に似たる俤、鏡の中にあり。片山里にして、いまだ鏡といふものをしらざりければ、嬉しく思ひて、日々に母に逢ふ心して、厚くこれを敬ひける。其父あやしと思ひて、其故をとふに、娘しかじか（筆者注：原文はくりかえし記号）のよしを答ふ。其父笑うて、それは汝が貌の、母の面ざしに似たるがうつれるなり。母にはあらずと申しければ、娘悲しみていふ、譬我なりとも、母のうみ給へるものなれば、その姿をうつして、朝夕これを拝する事実の母に逢奉るに同じとて、いよいよ（筆者注：原文は繰り返し記号）此の鏡を大切になし、父にも孝養を盡しけるとぞ聞えし。（下線引用者。引用は『日本教育文庫』孝義篇下（1911年）所収の『本朝女二十四孝』を再録した『孝経講話：聖典講義』（1934年）より。）

さて、これらを比べてみると、「越後松山孝女」の下線部を除いた前半部分がチェンバレンの第38課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] に相当することが分かる。チェンバレンは「夫の都土産」という鏡の来歴を付け加え、「幼にして」を「いとけなくして」と書き改めたほか、語順も一部変更しているがその他は「越後松山孝女」の本文をそのまま採っている。最大の変更点は、父親が娘に鏡の仕組みの種明かしをするという下線部分を削除し、娘を不憫に思って父親も涙に暮れたという一文を添えて物語を閉じた点である。このような編集操作を経て、チェンバレンの第38課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] は短くとも余韻が残る詩情豊かな読み物になったといえるのではないだろうか。Part 2の 'The Matsuyama Mirror' はローマ字本文をそのまま丁寧な訳出した英文となっている。

（2）第38課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] とちりめん本『松山鏡』

ちりめん本『松山鏡』は1886（明治19）年11月1日に版權免許を得て翌月刊行されている。『松山鏡』はケイト・ジェイムズ（Kate James / Mrs. T. H. James, 1845-1929、以下、ジェイムズ夫人）⁽¹⁴⁾ が初めて手掛けた『欧文日本昔噺』シリーズの作品である。ジェイムズ夫人は夫が海軍兵学校でチェンバレンと同僚であったことから知遇を得て家族ぐるみの付き合いをしていたという（Sharf, 1994年、48ページ）から、『ローマ字日本語読本』刊行前にチェンバレンから第38課の英訳 'The Matsuyama Mirror' を見せてもらっていたとしても不思議ではない。友人が英訳した 'The Matsuyama Mirror' を参照してジェイムズ夫人がちりめん本『松山鏡』の本文を書いたと考えるのが自然であり、ランゲックによるドイツ語の 'Das Madchen

aus Echigo' [越後の少女] を参照したとするには無理があることを認めざるを得ない。

ところで、ランゲックの 'Das Madchen aus Echigo' [越後の少女] だが、これは『本朝女二十四孝』の「越後松山孝女」を独訳したものだと思われる。ドイツ語の原文は未見のため断言は出来ないが、翻訳された「越後の少女」を読む限り、「越後松山孝女」を丁寧に、時折装飾を加えつつ訳出されたものだという印象を受ける。

チェンバレンの第38課 'Matsuyama Kagami' [松山鏡] には、1) 片田舎にはまだ普及していなかった珍しい都土産としての鏡、2) 娘を残して死去する母親とその遺言、3) 健気に遺言を守る娘、4) 娘を不憫に思う父親という4つの要素が含まれているが、ちりめん本『松山鏡』の本文をまとめるにあたって、ジェイムズ夫人は各要素を十分にふくらませて分かりやすい物語に仕立てている。チェンバレンによる第38課の文章は非常に短いものであるため、これを脚色してもう少し長い文章にする必要もあった。ジェイムズ夫人は、どのような経緯で父親が鏡を都から持ち帰ったのか、母親が鏡に対して抱いた思い、などを丁寧に語ったうえで、母親の死という悲劇的な場面に移っていくという手法をとった。死に瀕した母親の台詞をチェンバレンは 'you must look at this mirror morning and evening, thinking it to be myself,' [私だと思って朝に夕にこの鏡を見るんですよ。] としたが、ジェイムズ夫人はこれを 'promise that you will look into this mirror every night and every morning; there you will see me,' [この鏡を毎晩毎朝見ると約束しておくれ。そうすれば私に会えるから。] とした。表現こそ若干異なるが、ほぼ同じ内容である。

各要素をふくらませた部分は、ジェイムズ夫人の創作と考えて差し支えないだろう。ちりめん本『松山鏡』においてチェンバレンの話と明らかに異なるのは、末尾の部分である。ジェイムズ夫人は、父親が娘の健気さに涙を流したと記した後、次のような文章を加えている。

Nor could he find it in his heart to tell the child, that the image she saw in the mirror, was but the reflection of her own sweet face, by constant sympathy and association, becoming more and more like her dead mother's day by day. [父親は、娘が鏡の中に見ているのはそこに写った自身の可愛らしい顔であること、その顔はいつも思いを寄せて親しんでいるためか、亡くなった母親に日毎にますます似てきていることをどうしても娘に言うことは出来ませんでした。]

チェンバレンが父親の心情を読者の想像に任せて物語を閉じたのに対し、ジェイムズ夫人はチェンバレンがあえて明らかにしなかった父親の心のうちをしっかりと書き添えた。その結果、この物語は読み間違える心配のない、理解しやすいものとなったが、チェンバレンがこだわって演出した詩情は若干失われてしまったといえるのではないだろうか。

(3) 第49課 ‘Inaba no Shiro-usagi’ [稲羽^{いなば}の素兎^{しろうさぎ}] とちりめん本『因幡の白兎』

『古事記』を英訳したチェンバレンは、『ローマ字日本語読本』に出典を『古事記』とする話として、第46課 ‘Akaiko’ [赤猪子]、第47課 ‘Yamato-take no Mikoto’ [倭建命]、第49課 ‘Inaba no Shiro-usagi’ [稲羽の素兎] の3話を載せている。ここでは、第49課を取り上げて考察してみたい。

第49課 ‘Inaba no Shiro-usagi’ [稲羽の素兎] はローマ字表記によるものではあるが、ひとつの独立した物語としてこの逸話を日本語で紹介した初めての例といえるかもしれない。まずは、『古事記』と何冊もの注釈書を学んだチェンバレンがどのようにこの逸話をまとめたのかを見てみよう。冒頭部分は以下のとおりである。

Koko ni Ōkuninushi no Kami no mi harakara Yaso-gami mashiki. Shikaredomo, mina kuni wa Ōkuninushi no Kami ni yuzuri-matsuriki. Yuzuri-matsuriki yue wa, sono Yaso-gami ono-ono Inaba no Yakami-hime wo metoran no kokoro arite, tomo ni Inaba ni yukikeru toki ni, Ōkuninushi no Kami ni fukuro wo owase, tomobito to shite, tsure-yukiki. [ここに大国主神の御はらから八十神座^ましき。しかれども、みな国は大国主神に譲りまつりき。譲りまつりき故は、その八十神各々稲羽^{いなば}の八上比売^{やかみひめ}を娶らん^むの心ありて、共に稲羽^{いなば}に行きける時に、大国主神に袋^{ふくろ}を負わせ、従者^{ともびと}として、連れ行きき。]

チェンバレンは、『古事記』の原文をほぼ忠実に書き下しており、八十神が大国主神に国を譲り渡したというエピソードを冒頭で挙げ、その理由として、過去に遡って稲羽に行く途上での出来事を語り始める形式をとっている。ここでの変更点は、この時点ではまだ授けられていなかった「大国主神」という呼称を一貫して用いていることである。『古事記』では袋を背に八十神に従ったのは「大穴牟遲神^{おほあなむぢ}」とされ、その当時の呼称が適用されているが、チェンバレンは読者の混乱を避けるためにひとつの呼称に統一したものと思われる。チェンバレンは「海和邇」は ‘umi no wani’、^{みなと}「水門」は ‘minato’、^{かまのはな}「蒲黄」は ‘gama no hana’ と表わし、騙した海和邇に報復されて「裸」‘akahadaka’ となった兎が八十神に言われたとおりにしてさらに苦しんでいたところ、大国主神が正しい治療法を授けて元どおりの身体となったという展開をローマ字で記している。

しかしながら、末尾の兎の予言の言葉において、チェンバレンはもうひとつの変更を行っている。末尾の部分を抜き書きしてみると、次のとおりである。

Kare, oshie no gotoku seshikaba, sono mi moto no gotoku ni narite, Ōkuninushi no

Kami ni mōsaku: “Kano Yaso-gami wa kanarazu Yamaki-hime wo e-tamawaji. Fukuro wo oi-tamaedomo, Nanji Mikoto zo Hime mo mi kuni mo tsui ni e-tamawan” to mōshiki.

Kore “Inaba no Shiro-usagi” to iu mono nari. Ima ni Usagi-gami to zo iu.

[彼、教えのごとく為しかば、その身本もとのごとくなりて、大国主神に申さく：「かの八十神わ必ず八上比売を得賜わじ。袋を負い給えども、汝命みことぞ比売も御国もついに得賜わん」と申しき。／これ「稲羽の素兔」という者なり。今に兔神とぞ言う。]

『古事記』では兔の予言が末尾に置かれているが、チェンバレンは順序を変え、予言を先に置き、最後に兔の呼称を記してこの話を閉じている。また、それよりも大きな変更と言えるのは、大国主神が手に入れるものとして兔が予言するのが『古事記』では「八上比売」のみとなっているのに対し、‘Hime mo mi kuni mo’ [比売も御国も] と将来国を統治することにも言及させている点といえるだろう。『古事記』において、このような予言が実現を見るのは、大穴牟遲神がさらなる多くの試練に見舞われた後のことになるわけだが、先の展開を知っているチェンバレンはこのように言葉をつけ足さずにはいられなかったものと思われる。

Part 2では、この物語を ‘The White Hare of Inaba’ として訳出している。チェンバレンはおおむねローマ字本文に沿って丁寧に訳している。いくつかの単語を例にあげると、「大国主神」を ‘the God Master-of-the-Great-Land’、「八十神」を ‘the eighty Gods’、「海和邇」を ‘crocodile of the sea’、「水門みなと」を ‘river-mouth’、「蒲黄かまのはな」を ‘the pollen of the sedges’ としている。また、兔の予言は、“As for those eighty Gods, they shall certainly not get the Princess of Yakami. Though thou bearest the bag, Thy Highness shall at last get both the Princess and the country.” [八十神は決して八上比売を得ることは出来ないでしょう。汝は袋を担いでおられるが、あなた様は最後に比売と国の両方を手に入れることになるでしょう。] となっている。

ここでチェンバレンの『英訳古事記』における該当部分を確認し、この第49課の英訳 ‘The White Hare of Inaba’ と比べてみたいと思う。『英文古事記』では、『古事記』にあくまでも忠実に訳出する方針が貫かれていることから、「大国主神」を ‘the Diety Master-of-the-Great-Land’、「大穴牟遲神」を ‘the Deity Great-Name-Possessor’ と訳し、これらの呼称を使い分けている。第49課では「大国主神」を ‘the God Master-of-the-Great-Land’ と訳し、一貫してこの呼称が用いられていることは前述のとおりである。‘Deity’ は多神教の「神」を表す際に男神に対しても女神に対しても用いられる用語だが、第49課ではこれをより一般的な言葉である ‘God’ に置き換えている。

末尾の部分でも『英文古事記』では『古事記』の原文とおりの語順で翻訳されており、兔の予言で終わる。兔の言葉は、“These eighty Deities shall certainly not get the Princess of

Yakami. Though thou bearest the bag, Thine Augustness shall obtain her.”であり、八上比売を得ることのみが指摘されている。第49課では、婚姻のみならず国を治めることまでが言及されていたが、この加筆はチェンバレンがこの逸話を『ローマ字日本語読本』の教材読み物とする段階で行われたことが確認出来る。

さて、ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの第11号『因幡の白兎』（以下、ちりめん本『因幡の白兎』）はジェイムズ夫人が手掛けた『欧文日本昔噺』シリーズの2冊目の作品である。この作品を論じる際に『ローマ字日本語読本』第49課‘Inaba no Shiro-usagi’[稲羽の素兎]とこれを英訳した‘The White Hare of Inaba’が引き合いに出されたことはこれまでなかった。チェンバレンの『英訳古事記』の存在は広く知られているため、ジェイムズ夫人は『英訳古事記』を参考にちりめん本『因幡の白兎』の本文を書いたのだらうと推測されており、筆者もそのように理解していた。

しかしながら、ちりめん本『松山鏡』の場合と同様に、ジェイムズ夫人はチェンバレンから『ローマ字日本語読本』が刊行される前に第49課を英訳した‘The White Hare of Inaba’を入手していたと考えられる。第49課とちりめん本『因幡の白兎』の兎の予言を比較してみたところ、その予想は的中した。チェンバレンは兎に“As for those eighty Gods, they shall certainly not get the Princess of Yakami. Though thou bearest the bag, Thy Highness shall at last get both the Princess and the country.”と言わせたが、これをジェイムズ夫人は“As for those eighty Princes, your brothers, they shall not get the Princess of Yakami. Although you carry the bag, yet your Highness shall at last get both the Princess and the country.”とした。文語的表現を易しい表現に書き改めるなど手を入れてはいるが、下線部に関しては全く同じ言い回しで「比売と国の両方」が手に入ると伝えていることが確認出来る。この一致により、ジェイムズ夫人が『ローマ字日本語読本』第49課の‘The White Hare of Inaba’を典拠としてちりめん本『因幡の白兎』を書いたことは明らかである。

(4) ちりめん本『因幡の白兎』の特色

次に、ちりめん本『因幡の白兎』とチェンバレンの‘The White Hare of Inaba’の相違点を見ていきたい。最も大きな違いは、すでに谷本由美が指摘しているとおり、大国主神を‘the eighty-first brother’と訳し、〈神〉という属性を排除して意地悪な80人の兄たちと末の81番目の気の毒な弟という構図を強調したことだといえるだろう（谷本、2011年、47ページ）。チェンバレンは第49課‘Inaba no Shiro-usagi’[稲羽の素兎]で八十神を‘the eighty Gods’と訳しており、彼らの他に‘the God Master-of-the-Great Land’[大国主神]がいると記していることから、ジェイムズ夫人は81人兄弟と理解し、‘Now, there were once eighty-one

brothers, who were Princes in the land.’ [さて、81人の兄弟がおりました。彼らはその国の皇子たちでした。]とこの話を始めたのだと思われる。子どもが理解しやすい物語とするために、81番目という番号で大国主神を表し、〈神〉という属性を取り除くことが必要だと判断したのだろう。ジェイズ夫人は冒頭で簡潔に登場人物について説明し、ただちに旅立たせるが、彼らの関係の悪さを強調することによって、81番目の皇子が荷物運びをさせられる理由を示そうとしている。

兎を介してのその後の展開に関しては、ところどころ易しく言い換えたり言葉を足したりしながら、ジェイズ夫人はチェンバレンの表現を踏襲しつつその展開をほぼ忠実に辿っている。ちりめん本『松山鏡』の場合は非常に短いチェンバレンの‘The Matsuyama Mirror’をふくらませる必要があったが、ちりめん本『因幡の白兎』に関してはその必要はなかったといえるだろう。しかし、兎と鰐のやりとりに‘You silly crocodiles,’ [やあい、バカなワニたちめ]といった嘲り言葉を加えるなどのさまざまな工夫により、ジェイズ夫人は生き生きとした場面作りに成功している。

最後に兎が81番目の皇子に授けた予言の言葉がチェンバレンの‘The White Hare of Inaba’における兎の予言と全く同じであることは既に述べたが、ジェイズ夫人は予言に続けて次のように記して物語を閉じている。

Which things came to pass, for the Princess would have nothing to do with those eighty bad brothers, but chose the eighty-first who was kind and good. Then he was made King of the country, and lived happily all his life. [姫は80人の悪い兄たちを相手にせず、優しくて立派な81番目の皇子を選んだので、そのとおりにになりました。そして彼は国王となって一生幸せに暮らしました。]

この部分はジェイズ夫人による加筆ではなく、チェンバレンが‘The White Hare of Inaba’の冒頭に置いた、大国主神が最終的に国を治めるに至ったという記述を末尾に持ってきたものと思われる。そして、ジェイズ夫人は西洋の昔話の決まり文句のひとつでちりめん本『因幡の白兎』を締めくくり、ハッピーエンドが強調される作品に仕上げたのである。

IV. 『ローマ字日本語読本』と『正則文部省英語読本』第3巻

第I章で述べたとおり、チェンバレンは『正則文部省英語読本』全5巻の編纂を外山正一と共にやっている。1885(明治18)年12月に内閣制が始まり、初代文部大臣となった森有礼は

教科書の検定制度を導入すると共に文部省が率先して民間教科書の模範となるような教科書を作るように要請した（唐澤、1956年、146-147ページ）。

明治初期より用いられていた欧米直輸入の英語教科書を国産のものに切り替える段階に入ったこの頃、文部省から次のような2種類の英語教科書が刊行されている。1887（明治20）年から翌年にかけて出た全6巻の *English Readers: The High School Series* はウォルター・デニング（Walter Denning, 1846-1913）が編纂したもので、タイトルが示すとおりの上級者向けのものであった。1889（明治22）年に出たのが『正則文部省英語読本』全5巻で英語のタイトルは *The Mombushō Conversational Readers* であった。第1巻と第2巻ではアルファベットから始めて徐々に英語の基礎力を身につけられるように作られており、第3巻では和漢洋のさまざまな史話・説話ならびにそれらについての設問部分から成る155課を学ぶようになっている。第4巻には全て西洋の話から成る95課、第5巻では前半に『アリババと40人の盗賊』、後半に「リア王」が掲載されている。一貫して教師と生徒の間の会話文例が豊富に示されており、実践的な英語力を育てようとする新しいタイプの教科書であった。ここでは、この第3巻と『ローマ字日本語読本』の関係について検討してみたい。

筆者はかつて『正則文部省英語読本』と日本の児童文学の関係について論じた際に1889（明治22）年以前に刊行された国語教科書の内容との比較を試みたが、『正則文部省英語読本』第3巻で扱われた話のいくつかはどの教科書にも類話が見当たらず、これらの話がどこから採られたのか分からないままとなっていた⁽¹⁵⁾。

今回、『ローマ字日本語読本』の内容を詳しく調べていくうちに、当時出典不詳とした話はいずれも『ローマ字日本語読本』に所収されていたことが判明した。チェンバレンが双方に関わっていたのだから、同じような時期に編まれたこれらに共通点が見られるのはいわば当然といえるが、ようやく謎が解けたような気分を味わった。

『正則文部省英語読本』第3巻には、12の日本の話、9つの中国の話、21の西洋の話（このうち13話はイソップ寓話）が収められている。これらの話が時には2つの課に分割されて掲載され、それらの間に生徒と教師の会話からなる課が置かれるという形式が採られており、細分化された課が合わせて155に及んでいる。

日本の話は、徳川頼宣の話（第14課）、徳川家康と豊臣秀吉の話（第19課）、「松山鏡」（第38課・第40課）、雄略天皇の後の話（第45課）、北条泰時の話（第48課）、良秀の話（第53課・第55課）、塙保己一の話（第66課）、曾呂利の話（第69課・第71課）、伊藤仁斎の話（第73課・第75課）、倭建命の話（第113課）、柴田勝家の話（第125課・第128課）、半井宗洙の話（第134課）である。

これらのうち、「松山鏡」、良秀の話、曾呂利の話、倭建命の話、柴田勝家の話、半井宗洙の話の計6話は、その内容と使用されている英単語や構文に多くの共通点が見いだされることか

ら『ローマ字日本語読本』から採られたと考えられる。『ローマ字日本語読本』はあくまでも日本語を学ぶ外国人のために編まれているため、そのままの形では日本人の英語学習教材に転用するには難しい点がある。そのために、より易しい単語や構文への変換や簡略化が行われてはいるが、内容は『ローマ字日本語読本』所収の各話とほぼ同じである。

第38課・第40課のタイトルは‘THE MATSUYAMA MIRROR (I)’・‘THE MATSUYAMA MIRROR (II)’であり、『ローマ字日本語読本』第38課の‘The Matsuyama Mirror’とタイトルも同じで話の展開もあまり変わらないが、父親の存在感は薄められ、亡き母との約束を守った娘がその地域で一番の孝行娘になったと書き加えられている。英語教科書の教材としてはあるが、「松山鏡」が明治以降の近代的教科書に掲載されたのはこれが初めてといえるかもしれない。

タイトルは異なるが内容が同じものは、第53課・第55課の‘AN ARTIST’S OPPORTUNITY (I)’・‘AN ARTIST’S OPPORTUNITY (II)’と『ローマ字日本語読本』第40課の‘Ryōshū’s Picture of Fudō’の場合と第69課・第71課の‘THE SORORI’S SHREWD WIT (I)’・‘THE SORORI’S SHREWD WIT (II)’と『ローマ字日本語読本』第27課の‘A Hint as to Serve a Master’の場合である。前者は『宇治拾遺物語』からのものであり、後者は「曾呂利新左衛門の飯論」として知られるものである。

第113課のタイトルは、‘THE PRINCE YAMATO-TAKE AND THE BRAVORS OF KUMASO’で『ローマ字日本語読本』第47課の‘The Prince Yamato-take’に言葉を加えたものである。倭建命の熊襲退治の話は『尋常小学読本』巻5（文部省、1887年）および『高等小学読本』巻1（文部省、1888年）にも収められてはいるが、内容的にも使われている単語や構文などからも‘THE PRINCE YAMATO-TAKE AND THE BRAVORS OF KUMASO’は、‘The Prince Yamato-take’を簡略化したものと考えてよいだろう。

タイトルも内容もほぼ同じといえるのは、第125課・第128課の‘SHIBATA THE JAR-BREAKER (I)’・‘SHIBATA THE JAR-BREAKER (II)’と『ローマ字日本語読本』第21課の‘Shibata the Jar-Breaker’の柴田勝家の逸話ならびに第134課の‘A CURE FOR THEFT’と『ローマ字日本語読本』第24課の‘A Cure for Theft’の半井宗洙の逸話である。上記6話は『ローマ字日本語読本』のPart 2所収の英訳文から採られたものと考えられる。

中国の話に関しては、第3巻の9つの話のうちの3つが『ローマ字日本語読本』から採られたことが分かった。第21課の‘A USELESS GIFT’は、『ローマ字日本語読本』第3課の‘Refusing to Accept a Thousand Mile Horse’から、第57課・第59課の‘THE MOTHER OF MENCIUS (I)’・‘THE MOTHER OF MENCIUS (II)’は『ローマ字日本語読本』第14課の‘The Mother of Mencius’から、第106課の‘KISATSU’S DELICATE SENSE OF HONOUR’は『ローマ字日本語読本』第12課の‘The Story of Kisatsu’から採られたこと

が内容および単語や構文から明らかである。

以上のとおり、『ローマ字日本語読本』のPart 2からは日本の話6話と中国の話3話の英訳文が『文部省正則文部省英語読本』第3巻に採られ、日本人学生の英語教育に活用されるにいたった。なお、『ローマ字日本語読本』に収められたさまざまな話のうちのいくつかについては、Part 2の英訳文が明治20年代後半に英語学習雑誌『日本英学新誌』に再掲されたことも判明した。【表1】では該当する話に印をつけて示したのでご覧いただきたい。

おわりに

本稿では、これまであまり顧みられることのなかったチェンバレンの『ローマ字日本語読本』について調査したことをまとめた。第I章ではチェンバレンの来日の背景と日本語学習者のために『ローマ字日本語読本』を編むまでの経緯を辿り、第II章では『ローマ字日本語読本』の構成と特徴について論じた。主に中国と日本の史話・説話からなる64課の読み物教材は多岐にわたる出典から採られ、チェンバレンがそれらの文章を出来る限りそのままの形でローマ字表記に直したことが分かった。

第III章では、『ローマ字日本語読本』第38課‘Matsuyama Kagami’〔松山鏡〕が『本朝女二十四孝』の「越後松山孝女」に依拠するものであることを指摘し、ジェイムズ夫人によるちりめん本『松山鏡』と『因幡の白兎』の典拠は『ローマ字日本語読本』に収められたふたつの話であることを明らかにした。第IV章では、『ローマ字日本語読本』が『正則文部省英語読本』第3巻にも少なからず影響を及ぼしていることを述べた。

1888（明治21）年に刊行された『日本語口語入門』が第4版まで版を重ねたのに比べると、『日本近世文語文典』はあまり需要がなかったように見える。理論編の『日本近世文語文典』に付随した実践編テキストとして編まれた『ローマ字日本語読本』も特に注目されることはなかった。羅馬字会の運動が長く続けばローマ字を学ぶ日本人学習者のための「読本」にもなり得たかもしれないが、そのように活用された形跡は見当たらない。

しかしながら、『ローマ字日本語読本』がちりめん本『松山鏡』と『因幡の白兎』の誕生を促すことになり、『正則文部省英語読本』にも影響を与えたのは本稿で述べたとおりである。ちりめん本『松山鏡』と『因幡の白兎』に続いて巖谷小波が「日本昔噺」叢書の『松山鏡』と『兎と鰐』を書いたことによって、これらふたつの物語は日本の児童文学の世界に市民権を獲得するにいたった。道徳臭の強い『松山鏡』はやがて静かに姿を消したが、『因幡の白兎』はいまだに国語教科書や絵本の世界で現役として活躍中である。

注

- (1) チェンバレンの著作の邦題については、翻訳書が刊行されているものはその書名を、そうでないものは『日本事物誌 2』巻末の「チェンバレン主要著作目録」で用いられている書名を示した。本稿では、敬称を略したほか、書名を含め旧字体の漢字は新字体に置き換え、巻号などの漢数字もアラビア数字に書き改めた。
- (2) *A Romanized Japanese Reader; Consisting of Japanese Anecdotes, Maxims, etc., in Easy Written Style; with An English Translation and Notes* (『ローマ字日本語読本』) は今や大変な稀覯本となっているが、国立国会図書館には所蔵されている。なお、Columbia University と New York Public Library に所蔵される同書のコンテンツが HathiTrust Digital Library で公開されている。
- (3) ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズはその初めから英仏独その他の複数言語で刊行されたが、ここでは英語による作品を扱う。原タイトルは *The Matsuyama Mirror* ならびに *The Hare of Inaba* であるところを本稿ではその日本語タイトル『松山鏡』、『因幡の白兎』を用いることにする。
- (4) チェンバレンの経歴については、主に楠家重敏『ネズミはまだ生きている——チェンバレンの伝記——』(1986年、雄松堂出版) 巻末の「B=H= チェンバレン略年譜」に拠ったが、幼少期および兄弟関係については太田雄三『B・H・チェンバレン——日欧間の往復運動に生きた世界人』(1990年、リプロポート) の記述ならびに巻末の「略年譜」に拠った。
- (5) チェンバレンには海軍に入ったすぐ下の弟ヘンリー (Henry Chamberlain, 1853-1923) と末の弟ヒューストン (Houston Stewart Chamberlain, 1855-1927) がいた。ヒューストンはドイツで作家として活躍し、1916年にはドイツに帰化した。彼の主著といわれる *Die Grundlagen des Neunzehnten Jahrhunderts* (『19世紀の基礎』、1899年) はゲルマン民族の優位性を説いたためにナチズムの思想的基盤に用いられてしまったという。
- (6) 末弟ヒューストンの自伝を参照した太田雄三によると、ヴェルサイユの Avenue de Saint-Cloud にあった自宅の真向かいのリセ・アンペリアルにチェンバレンは通い、最終学年を終えてバカロレアを取得したという (太田、1990年、62ページ;75ページ)。現在、この地には難関大学への高い進学率を誇る中等教育学校・Lycée Hoche がある。同校は1803年創立の公立学校で1888年にヴェルサイユ出身の著名軍人 Lazare Hoche の名を冠して Lycée Hoche と改称されたという。改称前の Lycée impérial de Versailles にチェンバレンは通ったのではないかと思われるが、バカロレア取得については不詳。
- (7) 1886 (明治19) 年5月に羅馬字会から刊行されたローマ字で書かれた小冊子、*RŌMAJI NITE NIHONGO NO KAKIKATA* の Shogen [緒言] には選定の経緯が詳しく記されている。

- (8) 拙訳ならびに筆者がローマ字表記から漢字仮名交じり表記に直したものは〔 〕括弧に入れて示すことにする。ローマ字会が定めたローマ字の書き方によると「wa」は「わ」となるため、この方式に従う。これはドイツ滞在後に巖谷小波が提唱した仮名遣、いわゆる「わ仮名」の方式と同じといえる。
- (9) 高梨健吉著『日本英学史考』（東京法令出版、1996年）の第4章「チェンバレンを読む」には、これらの全文が漢字仮名交じり表記に直して紹介されている。
- (10) 1877（明治10）年設立の東京大学は1886（明治19）年に帝国大学と改称されるが、煩雑さを避けるために本稿では東京大学に統一する。
- (11) 1890（明治23）年9月20日の『東京日日新聞』広告欄に「本書ハ始メ文学博士外山正一及文科大学教授チャンブレ二氏ノ著述ニ係リ」とある。
- (12) 『見ぬ世の友』1巻第18話のタイトルは「子と姪まいと差別しやべつある事」となっているためにチェンバレンは‘Ko to Oi to Shabetsu Aru Koto」と表し、これを‘The Difference Between a Child and a Nephew」と英訳したことが分かった。
- (13) 『日本語口語入門』初版では、実践編に収められた逸話は3話であったが、増補改訂された第2版では、逸話の数は9話に増え、‘Makoto no Sekken’の口語版に加えて『ローマ字日本語読本』第31課の‘Mateba San-yō no Ai-yoru Naka’〔待てば算用の相寄る中〕の口語版も所収されている。タイトルは、分かりやすい‘Mateba Au Toshi’ならびに‘If they wait, their ages will come right.’に変更されている。
- (14) ジェイムズ夫人の生没年はこれまで不詳とされてきたが、Noboru Koyamaが2015年に発表したジェイムズ夫人と長女グレースについての論考“Grace James (1882-1965) and Mrs. T. H. (Kate) James (1845-1928) : Writers of Children’s Stories.”によって詳しい経歴などが明らかとなった。
- (15) 『論叢 児童文化』第38号から第40号（くさむら社、2010年）に発表した拙稿「『正則文部省英語読本』と日本の児童文学（1）・（2）・（3）——明治期英語教科書と日本の児童文学^⑭・^⑮・^⑯」では、『正則文部省英語読本』の内容と内外の児童文学との関連について論じた。

参考文献

〈一次資料（邦文）〉

- 荒川秀俊編著ほか『実録・大江戸壊滅の日』教育社、1982（NDL デジタルコレクション）
- 飯島忠夫『孝経講話：聖典講義』日本放送出版協会、1934（NDL デジタルコレクション）

- 池田善次郎編『女庭訓宝文庫』甘泉堂、1843（東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ）
- 石川松太郎編『女大学集』（東洋文庫 302）平凡社、1977
- 井上光貞監訳『日本書記 上』中央公論社、1987
- 井原西鶴『本朝桜陰比事』『西鶴全集：校訂』下巻、平民書房、1907(NDL デジタルコレクション)
- 『雨窓閑話』日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第1期第7巻、吉川弘文館、1993
- 内野熊一郎『孟子』（新釈漢文大系 4）明治書院、1962
- 太田錦城『梧窓漫筆』巻上、宝文閣、1879（NDL デジタルコレクション）
- 岡松甕谷『初学文範』巻之1、紹成書院、1876（NDL デジタルコレクション）
- 海後宗臣等編『日本教科書大系 近代篇』第5巻（国語）、講談社、1964
- 貝原益軒『女訓玉文庫』吉田屋文三郎、1858（東京学芸大学教育コンテンツアーカイブ）
- 孤山居士『本朝語園』1706（国書データベース）
- 佐伯梅友校注『古今和歌集』（岩波文庫）岩波書店、2022
- 菫遊燕編『和漢故事文選』萬屋清兵衛、1715（国書データベース）
- 醉多道士（増田繁三）編『本朝侠客伝』旭昇堂、1884（NDL デジタルコレクション）
- 鈴木棠三編注『耳袋 1』（東洋文庫 207）平凡社、1972
- 大道寺友山『落穂集（江戸史料叢書）』人物往来社、1967（NDL デジタルコレクション）
- 高橋貢他訳『宇治拾遺物語（上）』（講談社学術文庫）講談社、2018
- 橋春暉『北窓瑣談』日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第2期第15巻、吉川弘文館、1995
- チェンバレン、B. H.（大久保恵子編・訳）『チェンバレン『日本語口語入門』第2版 翻訳 付索引』笠間書院、1999
- チャンブレ、ピー・エッチ『日本小文典』文部省編輯局、1887（NDL デジタルコレクション）
- 辻本基定『一休諸国物語図絵拾遺』天、1844（国書データベース）
- 中野三敏校注『田舎荘子 当世下手談義 当世穴さがし』（新日本古典文学大系 81）岩波書店、1990
- 西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』（新装版）新潮社、2014
- 如曇子『可笑記』巻2、誠文堂編『近代日本文学大系』第1巻（仮名草子集）誠文堂、1934（NDL デジタルコレクション）
- 福沢諭吉『学者安心論』福沢諭吉、1876（NDL デジタルコレクション）
- 松村操編『曲亭遺稿 附 馬琴行状記』思誠堂、1883（近代書誌・近代画像データベース）
- 三浦理編『石川雅望集』有朋堂書店、1915
- 峯村文人校注『新古今和歌集』（新編日本古典文学全集 43）小学館、1995

- 宮栄二監修『校註 北越雪譜』、野島出版、1970
- 向嶋茂美編『李白と杜甫の事典』大修館書店、2019
- 森仙吉編『大岡政談畔倉重四郎之記』鶴声社、1885 (NDL デジタルコレクション)
- ヨンケル、フォン・ランゲック (奥沢康正訳)『外国人のみたお伽ばなし——京のお雇い医師
ヨンケルの『扶桑茶話』』思文閣出版、1993
- 山田俊雄他校注『庭訓往来 句双紙』(新日本古典文学大系 52) 岩波書店、1996
- 柳葉亭繁彦『雪の曙：赤穂美談』金玉堂、1885 (NDL デジタルコレクション)
- 吉田幸一編『語園』〈古活字版複製〉(古典文庫第 377 冊) 古典文庫、1978
- 吉田幸一編『見ぬ世の友』〈明暦版複製〉(古典文庫第 378 冊) 古典文庫、1978
- 羅馬字会『羅馬字雑誌』(NDL デジタルコレクション)
- 脇坂義堂『心学教諭録』林芳兵衛、1811 (国書データベース)

〈一次資料 (英文)〉

- Chamberlain, B. H. *A Translation of the "Ko-ji-ki", or "Records of Ancient Matters."* TASJ
Vol. X, Supplement, 1883.
- Chamberlain, B. H. *A Simplified Grammar of the Japanese Language, Modern Written Style.*
Trübner & Co. / Kelly & Walsh, 1886.
- Chamberlain, B. H. *A Romanized Japanese Reader ; Consisting of Japanese Anecdotes,
Maxims, etc., in Easy Written Style; with An English Translation and Notes.* Trübner &
Co. / Kelly & Walsh, 1886.
- James, Kate (Mrs. T.H.). *The Matsuyama Mirror.* Kōbunsha, 1886.
- James, Kate (Mrs. T.H.). *The Hare of Inaba.* Kōbunsha, 1886.

〈二次資料 (邦文)〉

- 相原由美子「バジル・ホール・チェンバレン」『近代文学研究叢書』第 38 卷、昭和女子大学近
代文学研究所、1973、pp.153-164
- 太田雄三『B・H・チェンバレン——日欧間の往復運動に生きた世界人』リプロポート、1990
- 尾崎るみ「『正則文部省英語読本』と日本の児童文学 (1) ——明治期英語教科書と日本の児童
文学⑭」『論叢 児童文化』第 38 号、くさむら社、2010、pp.1-7
- 尾崎るみ「『正則文部省英語読本』と日本の児童文学 (2) ——明治期英語教科書と日本の児童
文学⑮」『論叢 児童文化』第 39 号、くさむら社、2010、pp.1-8

- 尾崎るみ『『正則文部省英語読本』と日本の児童文学(3)——明治期英語教科書と日本の児童文学⑯』『論叢 児童文化』第40号、くさむら社、2010、pp.1-14
- 尾崎るみ「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの形成と『西洋昔噺』シリーズの開始」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』24、白百合女子大学児童文化研究センター、2021、pp.10-34
- 尾崎るみ「カール・フローレンツと長谷川武次郎——ちりめん本による日本詩歌の海外発信」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』26、白百合女子大学児童文化研究センター、2023、pp.57-99
- 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社、1956
- 川戸道昭編著『図説 日本の児童書四〇〇年』『図説 絵本・挿絵大事典』第1巻、大空社／ナダ出版センター、2008
- 日下部重太郎『国字問題』国語科科学講座第12(74)、明治書院、1933
- 楠家重敏『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』雄松堂出版、1986
- 渋谷新次郎編『RÔMAJI NITE NIHONGO NO KAKIKATA』羅馬字会、1886 (NDL デジタルコレクション)
- 高梨健吉『日本英学史考』東京法令出版、1996
- 谷本由美子「明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり—チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ—」『同志社女子大学生生活科学』Vol. 45、2011、pp. 44-53
- チェンバレン、B. H. (高梨健吉訳)『日本事物誌 2』(東洋文庫 147) 平凡社、1969
- 徳田進『孝子説話集の研究——二十四孝を中心に 近代篇(明治期)』井上書房、1964
- 花田富士夫『仮名草子研究—説話とその周辺—』(新典社研究叢書 151) 新典社、2003
- 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房、2004

〈二次資料 (英文)〉

- Koyama, Noboru. "Grace James (1882-1965) and Mrs. T. H. (Kate) James (1845-1928): Writers of Children's Stories." *Britain & Japan: Biographical Portraits*. Vol. IX. edited by Hugh Cortazzi, Renaissance Books, 2015. pp.472-480.
- Sharf, Frederic A. *Takejiro Hasegawa: Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books*. Peabody Essex Museum Collections. Volume 130, No.4, 1994.

〈データベース〉

近代書誌・近代画像データベース（国文学研究資料館）

<https://kindai.nijl.ac.jp>

国書データベース（国文学研究資料館）

<https://kokusho.nijl.ac.jp/>

国立国会図書館（NDL）デジタルコレクション

<http://dl.ndl.go.jp>

HathiTrust Digital Library

<http://www.hathitrust.org>

明治期出版広告データベース（国文学研究資料館）

<https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/records/4731>